

「2022年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学農学部1年 古川夏帆

空港から出ると、自動車が溢れかえらんばかりに停まっていた。あちらこちらから鳴り響くクラクションの音。海外を訪れるのが初めてだった私にとって、ベトナムの滞在はこのような衝撃から始まった。

都市部に近くなると、バイクの数が増えてきた。車と車の隙間を縫うようにして器用に走り去っていく。街並みはカラフルで、有彩色が多い。ベトナム語で書かれた看板も多くあり、情報量の多さを感じた。お手頃な飲食店はドアのない店がほとんどで、屋外に飲食スペースがあり、開放的だった。日本と全く違う街の様子は、興味深いものだった。

ベトナム語の授業は、渡航前に勉強した内容と重複するところもあった。それでも、相手の立場に合わせた代名詞など、細かいことを学ぶことができたので、意義はあったと思う。しかし、授業以外でベトナム語を話す機会は全くと言っていいほどなかった。ホテルでは英語が通じたし、スーパーやタクシーでは無言でも何とでもなる。ベトナム語で書かれたメニューを読むときに、Google レンズの翻訳機能を使うことがたびたびあったが、精度はあまりよくなかった。現地の学生と一緒にいるときは安心感があった。

日本語の授業では、何かと驚かされた。授業によっては、新出の単語や文法など、全て日本語で説明されるものもあった。日本の大学入試問題が教材になることもあり、日本人でも苦戦するような問題を解いている学生のレベルの高さを感じた。よくよく考えてみると、日本人は母語である日本語を漢字、単語、文法諸々を小中学校の9年間かけて学ぶ。しかし、ベトナム人学生は、大学以前にも勉強していた人はいるものの、外国語である日本語を大学のたった4年間で高い水準まで扱えるようになる。文字の種類が多く、文法も他言語と比較して複雑な日本語の学習は、生半可な興味では挫折するだろう。本当に日本が好きだ、日本に行きたいという気持ちを持っているからこそ頑張れるのだろうと思った。

共同発表では、日本との比較を通しながら、ベトナムの交通についてのスライドを作成した。3日目にハノイのメトロに乗る機会があり、文献だけにとどまらない、実体験に即した調査ができてよかった。他のグループの発表も、聞いていて面白いものだった。

慣れない環境や食事へのストレス、疲労など様々な要因からか、5日目には熱を出してしまった。熱が引いてからはお腹の調子が悪くなり、6日目の実地研修は休むことを余儀なくされた。快方に向かってからも、これ以上体調を崩したくなかった。それ以降は結構な割合でスーパーの日本食を食べ、早く寝ることを心掛けた。大きく体調を崩したのが自分だけだったので、もどかしいと思ったのは事実だ。観光にはあまり行けなかったが、普段とは違う環境に身を置けるだけで十分満足だった。海外にいる。それだけで何もかもが新鮮だった。

このような場面では、ベトナムの文化を賞賛すべきなのかもしれない。確かにベトナムには美味しい食事もあったし、寺院やチャンアンはとても魅力的だった。しかし、私はこのプログラムを通して、日本の素晴らしさを改めて実感した。道路を渡るときにいちいち冷や冷やしなくて良い。氷入りの飲み物を不安がる必要もない。日本は何かと安心で、快適なのだ。海を越えた場所から見ると、日本の住みやすさがはっきりと分かるのだった。それでも、海外への興味が消えたわけでは決してない。国内で行われる国際交流系のイベントに今後も積極的に参加していきたいと思う。

楽しいことばかりではなかったが、参加したことを後悔する気持ちは微塵もない。疑いようもなく、貴重な経験になった。